地獄の中にも仏はあった

遠賀郡水巻町　　満田　勉

昭和１９年６月、その頃はビルマ全軍も、連合軍の総反攻を支えきれず、各前線は一歩一歩と後退の道を辿っていた。米英中の三国首脳は、重慶軍を支援するため、戦略物資の新しい輸送路を印度アッサム州の「レド」を起点として、北ビルマ、ベトカイ山脈を横断して、中国雲南省の首都「昆明」に通ずるいわゆるレド公路の開設を急いでいた。この輸送を許してはならぬと、九州編成の第１８師団（別名菊部隊）が阻止の任務に当ることとなった。

そのときの第１８師団は、通常兵力の半分６０００名余り、これに対し近代装備の連合軍は９万人を数え、１５対１の戦力比は正に苛酷な対決であり、始めから戦いの成立は至難なことであった。深いジャングルに覆れた地形を巧みに使用して、１日でも長く持ち応えることが、インパール作戦の勝利に繋がる助成作戦でもあった。制空権を失った戦いは正に残酷である。空陸一帯の攻勢に我が陣地は敵の突破を容易にし、その都度将兵達は次々に倒れていった。新しく兵員の補充のない師団は、その数は更に弱少することとなった。数を誇る敵軍は随所に後方を遮断し、我が部隊のせん滅を企図するが、地形を巧みに利用し、何回となく危機を脱し、日増しに戦闘は激化することとなった。激しい雨に打たれて今日も退却行が続く。

ただ一本の本道を遮断された傷病兵達の後退はまことに哀れである。杖にすがり歯を食いしばって嶺伝いの苦しい脱出である。幾日も食べない身体は精も魂も尽き果て、自分の死を既に悟ったのであろうか、坐ったまま一点を見つめている者あり。「助けて下さい」「連れて行って下さい」と泣き叫びながら通り行く兵の脚にすがりつく者あり。まさに阿鼻叫喚の様相である。しかしどの兵達も疲労した身体で、人の面倒まで見る余裕はなく、置き去りにする外はなかった。比較的元気な参謀達は立ち止まり「頑張れよ、元気を出せよ、この山を越えたら腹一杯食糧が待ってるぞ」

また、ある者は「早く歩くんだ、急ぐんだ、麓にはもう敵が来ているぞ」等励ましの声をかけて通り過ぎてゆく。しかし、ここまで来るのがようやくで、一歩も歩けない者ばかりである。精魂尽き果てたのであろうか。動かぬ身体にはもう銀蝿がたかっている。

私もこのとき同じ環境にあった。鉄帽に外被（合羽）、それに汚れた褌ひとつという状態で往時の皇軍の姿ではない。

今日で何日食べないであろうか。思い出す力もない。１０日程前大豆の配給があったが、炊くことも出来ず、水で洗い軟かくして食べたのが最後であった。もうあきらめたのか胃袋も求めようとはしない。飢餓による栄養失調でしびれ脚気が全身を冒し、胸をつねっても感覚はなく、全く痛さもない。またアメーバー赤痢の併発、数分毎に便意をもよおすが、その下痢便にはかじった野草の色がついている。

吸血山蛭が、薄くなった血を求めて首から脚に至るまで、まつわりついて離れない。

元気なものは人のことなどかまわず、どんどんと追い越してゆく。羨しい限りである。一度坐ったら再び起きあがる苦しさを思い、一歩一歩と杖にすがり、牛の歩みが続く。麓の方から激しく銃声が聞こえるようになった。軍旗を奉持する歩兵の一隊が通り過ぎると追い越すものが次第に少なくなってきた。もうこれより後に続くものはいないのであろうか。大きな山芋のつるが幾つもあるが、今はそれを掘る力もない。一歩一歩が次第に苦しくなったきた。この辺りから置き去りにされた屍体が次第に多くなってきた。本隊に置き去りにされた今の自分の姿である。

私はこのとき腰の手榴弾に手をかけた。自決用にと今日まで離さず持っていたものである。

齢２５、人生の青春はなくも、総てをこの戦いに費やしたことに、悔いも迷いもなかった。今まさに生命の灯が消えようとするとき、私の還りを待つ母の面影が浮かんで来た。一番頼りとする兄の顔がうつろに浮かんで来た。今決別しようとするとき、自決ということが果して立派に散り果たしたといえるであろうか。固く握った右手の手榴弾にふるえを押さえ切れない。私は思い直した。まだ生きよう。まだ歩こう。連日の激しい雨が頬を叩く。側にいた戦友に声をかけた。「福田先に行くぞ」（常雄兵長長崎県松浦市出身）。しかし彼は私の呼びかけに反応することはなかった。５年間戦陣を共にした同年兵である。

漸やくにして嶺の斜面から脱出路の麓が見えてきた。泥濘と化した斜面を滑り降りると小さな渓流で、岩を叩く水音が激しい。パンパンと銃声が聞えてくる。既にここにも敵が先廻りしていたのである。軽重兵が応戦していたが、少数の敵が幸いして、間もなく脱出路の確保で武運に恵まれることとなった。

本隊の姿はまだ先であろうか見当らない。麓より見上ぐる昨日の嶺は思ったよりも高く、疲労した切った身体でよくも突破出来たものと、今でもあのときのことを追想し戦慄を覚えるときがある。この山の名は知る由もないが、我が部隊にとっては、まことに悲惨な歴史を残すこととなり、幾百人の戦友がこの嶺で倒れ、今尚草生す屍となり、遺骨すら収容されることなく置き去りにされたままである。奇しくも生き残った戦友達は、何時までもこれを忘れないため、この山を郷土の名にちなんで筑紫峠、辿った道を白骨街道と呼ぶようになった。福田常雄兵長も再び還ってくることはなかった。私はこの戦場で地獄を見た。そして体験をした。あの時の状況が５０年経った今でも鮮明に記憶の中から消ゆることはない。

共に戦って倒れた戦友達の面影が走馬灯の巡るが如く去来する。２年半前のシンガポール攻略戦では激戦の中で勝利の喜びを体験した。そしてこのたびの地獄の戦いと明暗を分けたが、戦争とはまことに残酷なものであった。勝者と敗者共に残したものは罪科のみである。戦争は絶対にしてはならない。平和な今の生活の中で、１椀の飯、１匹の子魚に箸をつけるときも、あの飢餓に泣いたときが浮んでくる。

孫達には絶対に銃を持たせてはならない。残された短い余生のこの頃これを願う毎日である。